

上腹部愁訴を有する症例の意識調査

Attitude survey of patients with upper abdominal complaints

中島 修¹⁾, 今中 景子¹⁾, 青木 望²⁾

1) 化学療法研究所附属病院, 2) 化学療法研究所

We conducted a survey of eating habits, lifestyle, stress, satisfaction with pharmacotherapy, and efficacy of Western medicine versus Kampo medicine in 363 patients presenting with vague upper abdominal complaints. These patients with upper abdominal complaints also had various other symptoms, such as fatigue, headache, dizziness, and shoulder stiffness. Their abdominal symptoms included abdominal pain, heartburn, and abdominal discomfort. Western medicine was effective against the abdominal symptoms, but not the other symptoms including fatigue, so that the quality of life was impaired. On the other hand, Kampo medicine improved upper abdominal complaints as well as the other symptoms, and the patients placed a high value on its therapeutic efficacy. The results of this survey suggest the usefulness of Kampo medicine, which treats the whole person, for vague upper abdominal complaints.

【目 的】

上腹部愁訴を主症状として来院する患者さんは少なくない。器質的病変が除外された場合は、慢性胃炎または NUD と診断されるが、発症要因の多様性から治療に流動的な面も否定できない。また、これら疾患の特徴から QOL の改善は重要であり、西洋医学一辺倒では解決されない。今回、慢性胃炎、NUD と診断された症例の食生活、生活習慣、ストレスの程度、薬物治療に対する満足度など西洋薬と漢方薬に分けて調査したので報告する。

【方法および結果】

上腹部愁訴を有する 363 例（男性 154 例、女性 209 例）を対象に、インターネットによる調査を実施した（日本エル・シー・エー）。調査回数は初回受診時と治療後の 2 時点で、調査期間は 3 週間であった。主訴は初回受診時も治療後も上腹部愁訴が多かったが、最も強く感じている症状を追跡すると治療経過とともに上腹部愁訴の比率が低下し、その他の症状の比率が高くなった。また、薬剤服用率では攻撃因子抑制薬が減少し、漢方薬が増加した。治療満足度では、主訴に対しては攻撃因子抑制薬、粘膜防御因子増強薬、漢方薬が高く、その他の症状に対しては漢方薬が高かった。

【考察および結論】

上腹部不定愁訴を主症状として来院する患者さんの症状を診ると、腹部痛、胸やけ、腹部不快感はもちろんであるが、疲労倦怠感、頭痛・めまい、肩こりなどの上腹部愁訴を除くその他の症状を多く抱えている。上腹部愁訴の薬物治療としては攻撃因子抑制薬、粘膜防御因子増強薬が主に使用され、一定の効果は得られているが、疲労倦怠感を中心としたその他の症状は改善されずに残存している場合が多くみられ、患者さんの QOL 低下を招いている。

今回の調査結果では、患者さんはその他の症状に対する漢方薬治療に満足感を得ており、治療効果も実感している。また、上腹部愁訴についても治療が経過するとともに、腹部痛、胸やけ、食欲不振、膨満感、吐き気に対する漢方薬での治療効果の実感度を高く評価している。これらのことから、上腹部愁訴の薬物治療において全人医療の漢方薬の有用性が示唆される。